

校内における
交流及び共同学習の充実
—多層的な支援システムを手がかりに—

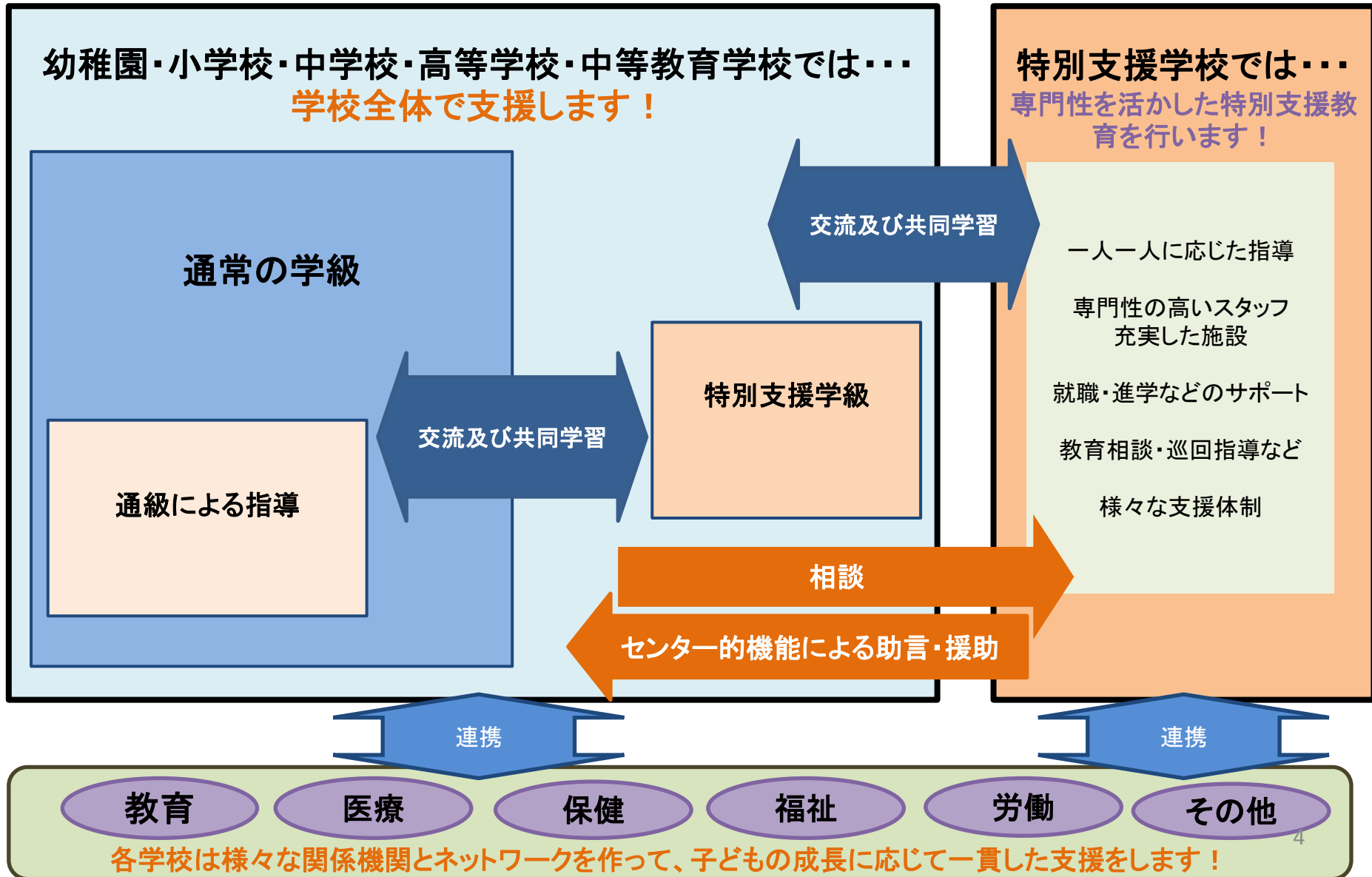
研修事業部
総括研究員 齊藤由美子

本日のお話の内容

1. 教育施策としての交流及び共同学習
2. 学校全体で取り組む多層的な支援システム
(Multi-Tiered System of Supports :MTSS)
3. 小学校内における交流及び共同学習の事例

1. 教育施策としての交流及び共同学習

日本における特別支援教育 (インクルーシブ教育システム)



1. 共生社会の形成に向けた教育施策 としての交流及び共同学習

中央教育審議会初等中等教育分科会報告「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」(平成24年7月)

「改正障害者基本法の理念に基づき、障害のある子どもと障害のない子どもが可能な限り共に学ぶことができるように配慮する観点から、交流及び共同学習を一層推進していくことが重要である。」

→「交流及び共同学習の推進」は基礎的環境整備の一項目

→「多様な学びの場の整備と学校間連携等の推進」における交流及び共同学習の重要性

文部科学省交流及び共同学習ガイド(平成20年)

- ・「交流及び共同学習」とは、相互のふれ合いを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする「交流の側面」と、教科等のねらいの達成を目的とする「共同学習の側面」が一体としてあることをより明確に表す。
- ・この二つの側面は分かちがたいものとして捉え、推進していく必要がある。

心のバリアフリー学習推進会議 報告書(平成30年)

- 交流及び共同学習においては、教育課程の連続性や学校生活との関連性に欠け、単発の交流機会にとどまってしまう場合や、障害について形式的に理解させる程度にとどまっている場合も多く見られる。
- 交流及び共同学習を継続して取り組んでいくためには、各学校が、交流及び共同学習によって児童生徒等のだのような資質・能力を育成するのかを明確にした上で、年間を通じて計画的に取組を進めていくことが重要であり、教育課程を編成する際に、各教科等において効果的に交流及び共同学習の機会を設ける必要がある。

通常の学級の現状

○平成29年3月文部科学省【学習指導要領改正に関する通知】

- 障害のある子ども、配慮を要する子どもが在籍していること
- 子ども一人一人にあった指導の充実が求められていること

○平成27年12月中教審答申

【チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について】

- 児童生徒指導や特別支援教育に関わる課題が複雑化・多様化
- 学校がチームとして機能する必要性



交流及び共同学習を充実させる方策は、
このような通常の学級の状況を
前提にしたものでなければならない！

2. 学校全体で取り組む 多層的な支援システム

(Multi-Tiered System of Supports :MTSS)

学校全体で取り組む多層的な支援システム

Multi-Tiered System of Supports (MTSS)

学習面

3次的な取組

集中的に支援が必要な子ども

- ・密度の高い指導

2次的な取組

配慮を要する子ども

- ・小集団における支援
- ・個別の支援 等

1次的な取組

すべての子ども

- ・わかりやすい授業
- ・多様なニーズに応じた目標と評価
- ・子どもの主体的活動と選択 等

社会性・行動面

3次的な取組

集中的に支援が必要な子ども

- ・密度の高い指導

2次的な取組

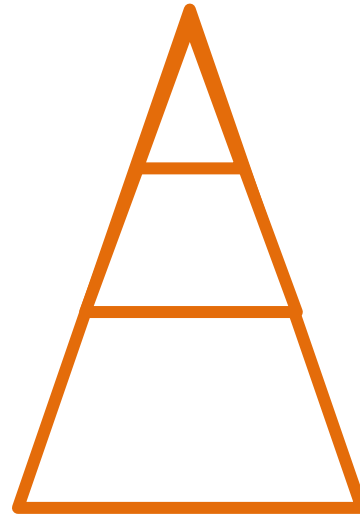
配慮を要する子ども

- ・小集団における支援
- ・教育相談 等

1次的な取組

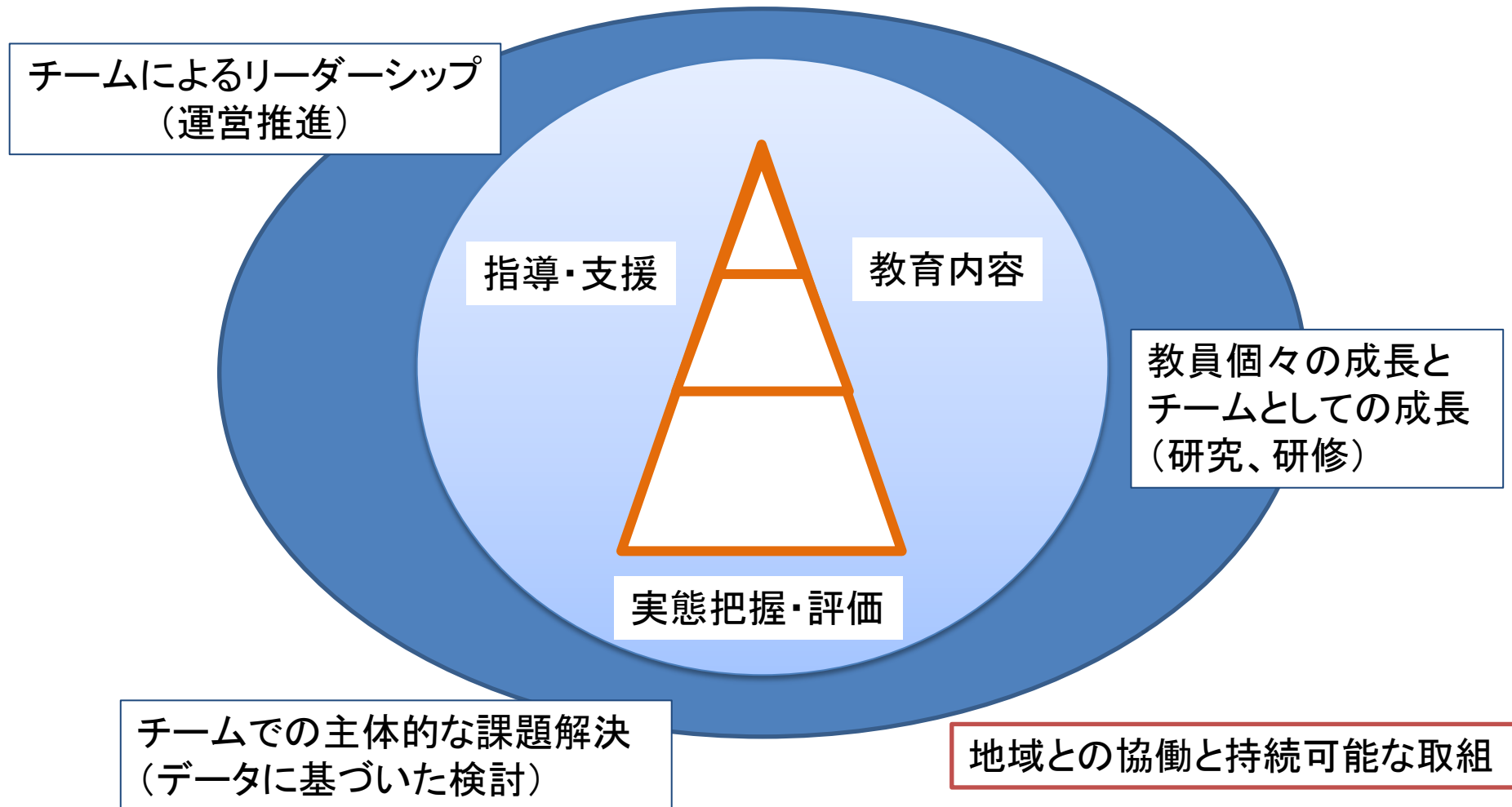
すべての子ども

- ・居心地のよい学級づくり
- ・安定した仲間関係
- ・肯定的な承認
- ・自己決定と社会貢献 等



学校全体で取り組む多層的な支援システム

Multi-Tiered System of Supports (MTSS)



通常の学級における交流及び共同学習の活動と 基礎的環境整備・合理的配慮の考え方との関連

基礎的環境整備:

- ・多層的支援システムによって、学校のすべての子どもがニーズの程度に応じ指導・支援が受けられるような、学校づくりが行われていること。
- ・ベースとなる通常の学級において、学習のユニバーサルデザイン(UDL)によってできるだけ多くの子どもが学ぶことができ、わかりやすくチャレンジのある授業や、お互いを認め合う学級経営ができていること。 *UDLについては次のスライドで説明

合理的配慮:

- ・特別支援学校・特別支援学級の子どもが、通常の学級で交流及び共同学習を行う際に、上記の基礎的環境整備に加え、その子どもの学びに必要な変更調整を行うこと。

土台となる通常の学級における一次的取組として…

学習のユニバーサルデザイン

(Universal Design for Learning CAST, 2017)

多様なニーズ・学習スタイルをもつ子どもたちが学んでいることを前提にして、通常の学級での学習を組み立てる

○Multiple Means of Representation:

子ども一人ひとりに、情報や教えた内容を伝えるための、〈多様な〉方法が用意されていること

○Multiple Means of Action & Expression:

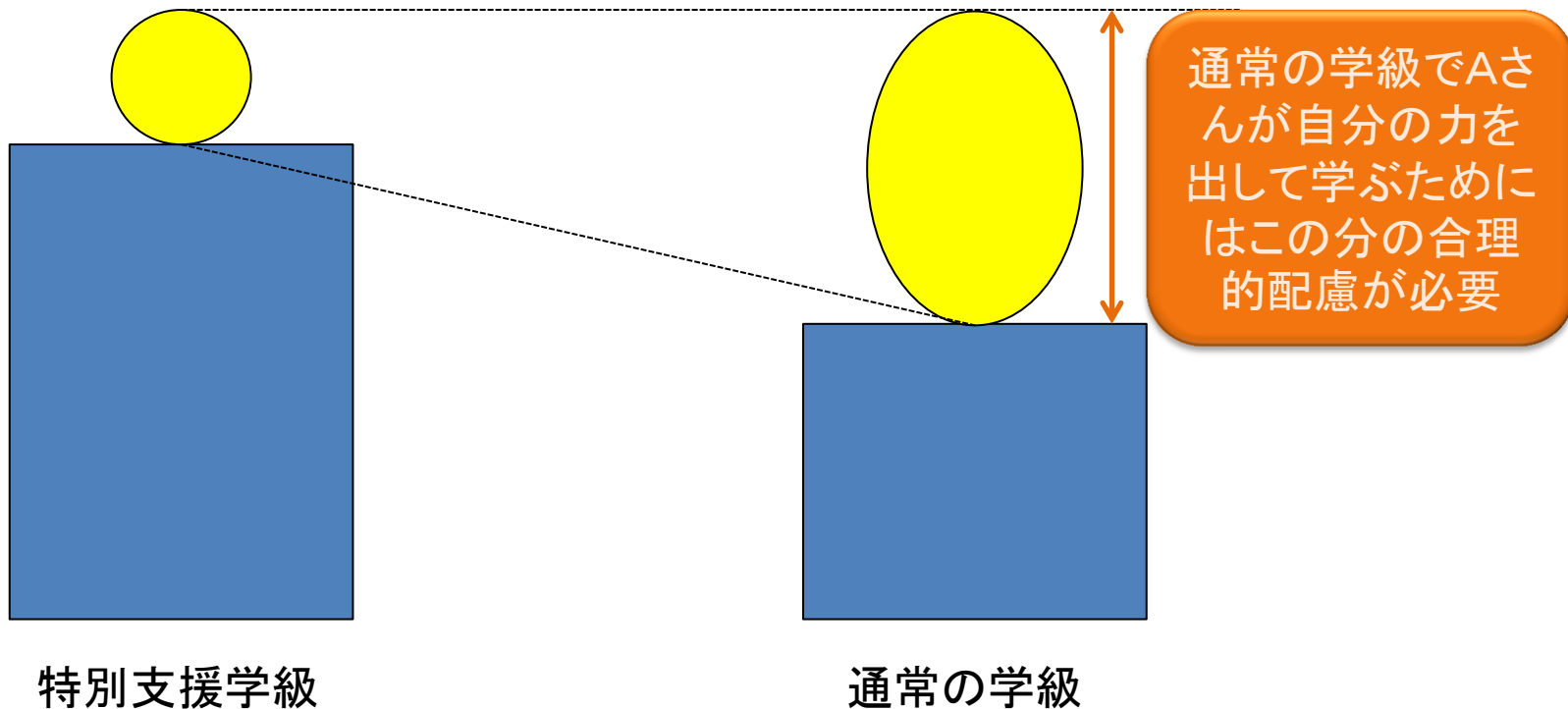
子ども一人ひとりが、考えたことやわかっていることを表現・発信するための、〈多様な〉方法が用意されていること

○Multiple Means of Engagement:

子ども一人ひとりが、モチベーションをもって学習活動に取り組むための、〈多様な〉方法が用意されていること

三次的取組の対象であるAさんが通常の学級で学ぶ場合・・・

学びの場で異なる基礎的環境整備と合理的配慮



3. 小学校内における 交流及び共同学習の事例

平成29年度 地域実践研究
交流及び共同学習の推進
～小学校内の交流及び共同学習～

研究の概要:

- ・校内の学習会を通して学習のユニバーサルデザインの視点を全職員で共有する。
- ・校内研究で、UDLの視点を授業づくりに活かした「すべての子どもにとってわかりやすく、自分の力に応じてチャレンジできる授業」をめざし、お互いの授業を見あう。
- ・特別支援学級の子どもが通常の学級に入る交流及び共同学習の研究授業において、通常の学級担任、特別支援学級担任と一緒に学習指導案を検討。
- ・当日の研究授業について、校内の全教職員で振り返る。
- ・教員の意識や取り組みの変化について検証する。

学習指導案の検討について

- 本時の目標を確認する(通常の学級の子どもと特別支援学級の子どもでは異なる)。
- 通常の学級の担任は、指導案の中で、在籍する通級指導対象の子どもや配慮を要する子ども(A.B.C)がつまづきそうな場面を予測して、UDLの視点に基づいて対応を検討する。
- 作成された指導案に、特別支援学級の担任は、対象となる子ども(D)の情報を加筆し、合理的配慮を検討する。

学習指導案より

(3) 本時の流れ ※本時の目標「だしのうま味を味わい、実習に向けてだしに対する興味をもつ。」(関・意・態)

学習活動	想定されるバリア	オプション・手立て	再構成 (全ての児童に向けての手立て) 【本時の評価】
1 みそ汁に入っているものを考える。 ・みそ、実(具)、だし 2 本時のあてをつかむ。	(A・B・C) ・活動の見通しがもてない。	・黒板に拡大掲示した活動の手順を見て、活動の見通しをもてるようにする。	・視覚的に捉えられるように、活動の手順をカードにして机に配る。
おいしいみそ汁をつくるために だしのひみつを さぐろう	(A・B) ・飲み比べでは、4つのだしを飲み比べるので、どちらかわからなくなる。	・A～Dのコップの分別がつくように色分けをし、コップを置く場所も色分けして示す。	・飲み比べをする際には、だしによって色別の紙コップを用意する。
3 だしの飲み比べをする。 ①A～Dのだしを飲み比べる。 ②A～Dが何の材料を使っただしか、意見を伝え合う。 ・魚っぽいにおいがあるから、にぼしが使われている。 ・透明だから、お湯かな。 ・かつおぶしと似ている色だ。 ③A～Dが何の材料を使っただしか、一人で予想を立てる。(ミニホワイトボード) ④予想をグループで見せ合う。 ⑤教師からA～Dのだしの材料を聞く。	(A) ・班で自分の意見がうまく言えない。 (A・B) ・予想を言葉で表現することが難しい。	(A) ・話し合いのルールを確認する。 ・リーダー(話し合いの司会)が、一人ひとりの意見を聞く。 (A・B) ・ミニホワイトボード上でマグネット(かつお・にぼし・お湯・昆布のイラスト)を操作して予想を立てる。	・予想する際には、 見た目・他のだしと比べて・におい・味 について考えるとよいことを伝える。 ・予想が立てやすいように、ミニホワイトボードを用意する。
A: 昆布 B: お湯 C: にぼし D: かつおぶし	(B・C) 全体への指示が通りにくい。	・話を聞く場面だと気づかせるサインを伝えておく。	・話を聞く場面だと気づいた児童が、サインを出し、周りの児童も話を聴く姿勢になるように促す。
④Aとア・Bとイ・Cとウ・Dとエがそれぞれ同じ材料から作っただしが入っていることを確認する。 ⑤Aとア・Bとイ・Cとウ・Dとエを飲み比べる。 ⑥気づいたことや、感じたことを友だちと話したり、ミニホワイトボードに書いたりする。 5 だしのおいしさのひみつ「うま味」について知る。 ・栄養士からの話を聞く。(担任) 6 授業の振り返りをする。	(A・B) 聴覚からの情報だけでは、内容を理解することが難しい。 (A・B) 振り返りを言葉で書くことが難しい。	・話ししている内容を、文字や図で示す。 ・話の内容が分かりやすくなるよう、文字や図を使う。 (A・B) ・振り返りプリントを選択できるようにする。	・話を聞く場面だと気づかせるサインを伝えておく。 ・話ししている内容を、文字や図で示す。 ・振り返りプリントを選択できるようにする。
7 次時の活動の見直しをもつ。			【関】だしのうま味を味わい、実習に向けてだしに対する興味をもっている。

(4) 参観の視点

・支援を要する児童が理解できるよう、視覚的に捉えられるような指導方法(提示の仕方)

(5) 評価

・だしのうま味を味わい、実習に向けてだしに対する興味をもっている。

通常の学級の担任が作成

(3) 本時の流れ ※本時の目標「みそ汁に使われているだしの存在を知ることができる。」(知・理)

想定されるバリア	オプション・手立て	再構成 (全ての児童に向けての手立て) 【本時の評価】 Dさんの評価
Dさんのバリア (D)・教師の言葉だけでは、理解できない。 (A・B・C) ・活動の見通しがもてない。	Dさんへの個別支援 ・黒板に拡大掲示した活動の手順を見て、活動の見通しをもてるようにする。	・視覚的に捉えられるように、活動の手順をカードにして机に配る。
(D)・どのような手順で調理を進めていくのか理解できない。 (A・B) ・飲み比べでは、4つのだしを飲み比べるので、どちらかわからなくなる。 (A) ・班で自分の意見がうまく言えない。 (A・B) ・予想を言葉で表現することが難しい。 (B・C) ・全体への指示が通りにくい。	・継続的に手順を理解できるようにカードを用意する。 ・A～Dのコップの分別がつくように色分けをし、コップを置く場所も色分けして示す。 ・味覚が過敏であるため、スプーンにだしを移したものを味わう。 ・区別がつかない時は本物の素材と見比べさせる。それでも区別が難しい場合は、答えの書いているコップと比べさせ、自分の持っているコップの中身とマッチングさせる。 ・おいしかったかどうかOXの記号でも表してよいことを伝える。 ・みそ汁の飲む比が難しい場合は、だし入りのみそ汁とお湯のみそ汁を飲み比べ、違いを焦点化させる。	・飲み比べをする際には、だしによって色別の紙コップを用意する。 ・全員の見聞に耳を傾けるように全体に声をかける。 ・予想する際には、 見た目・他のだしと比べて・におい・味 について考えるとよいことを伝える。 ・予想が立てやすいように、ミニホワイトボードを用意する。 ・理由を書ける児童には、ホワイトボードマーカーを用意する。
(D)・飲み比べでは、2つのみそ汁を飲み比べるので、どちらかわからなくなる。 ・話し合いのルールを確認する。 ・班で自分の意見がうまく言えない。友達の見聞を聞いていない。	・みそ汁の飲む比が難しい場合は、だし入りのみそ汁とお湯のみそ汁を飲み比べ、違いを焦点化させる。 ・話し合いのルールを確認する。 ・リーダー(話し合いの司会)が、一人ひとりの意見を聞く。 ・ミニホワイトボード上でマグネット(かつお・にぼし・お湯・昆布のイラスト)を操作して予想を立てる。	・話を聞く場面だと気づかせるサインを出し、周りの児童も話を聴く姿勢になるように促す。 ・話の内容が分かりやすくなるよう、文字や図を使う。 【関】だしのうま味を味わい、実習に向けてだしに対する興味をもっている。
(A・B) ・聴覚からの情報だけでは、内容を理解することが難しい。 (A・B) 振り返りを言葉で書くことが難しい。	・話を聞く場面だと気づかせるサインを伝えておく。 ・話ししている内容を、文字や図で示す。 ・振り返りプリントを選択できるようにする。	・話を聞く場面だと気づかせるサインを伝えておく。 ・話ししている内容を、文字や図で示す。 ・振り返りプリントを選択できるようにする。

(4) 授業の視点

・特別支援学級児童が理解できるように、視覚的に捉えられる手順を理解するための「手順カード」、だしの存在を確認する

(5) 評価

・みそ汁に使われているだしの存在を知ることができる。

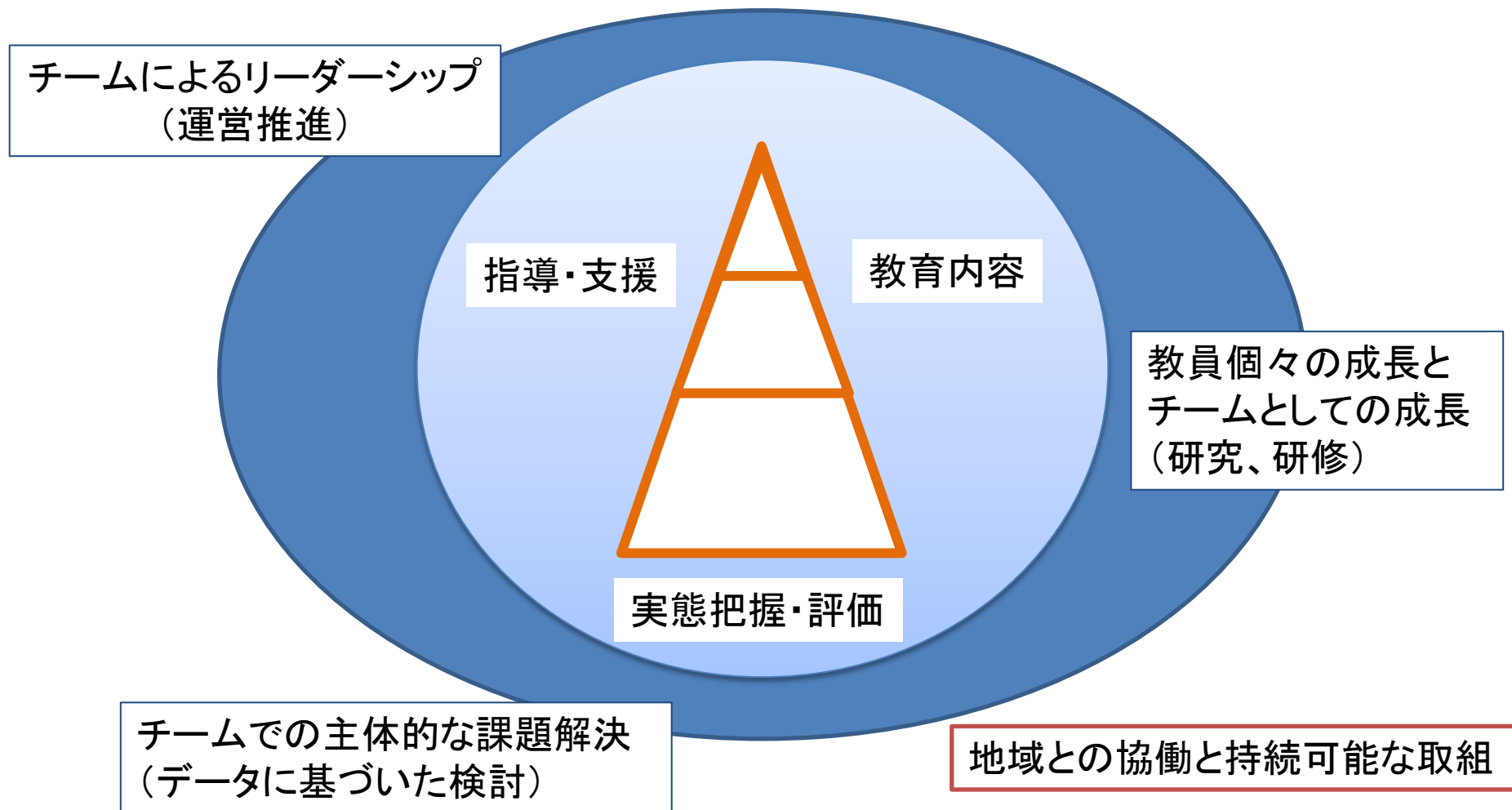
**特別支援学級担任が対象となる子ども
の情報を追加**

教員自身の自己評価と変化

1. (通常の学級の担任)UDLの視点で交流児童への三次支援を考えたことが、通常の学級の児童に対しても**有効な一次支援へとつながる**ことに気づいた。
2. (特別支援学級の担任)交流児童の目標・手立てをしっかりと考えることで、**交流級でも本人を輝かせることができる**と実感した。
3. (特別支援学級の担任)支援の手立てを考えるときには、本時の目標がとても重要であり、交流級担任との、交流児童の**個別目標の共有化**も必要である。そうすることで必要な手立て・支援がはっきりしてぶれにくい。
4. (通常の学級の担任)本時の授業後には様々な場面で交流児童のことが気になり、**何げない場面で本人のアセスメント**につながるようになった。**支援級の先生との情報交換も増えた。**

学校全体で取り組む多層的な支援システム

Multi-Tiered System of Supports (MTSS)



多層的な支援システムを手がかりに、すべての子どもが生き生きと学ぶ学校づくりを！₂₀